みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2025年9月10日

今月のひとこと

【Vol.273】今月のひとこと

今月のひとこと

生き延びる力～戦中・戦後の聞き書き（後半）

FIWA みんなのお金のアドバイザー協会®
会長 岡本和久

1945年8月15日、玉音放送によって太平洋戦争が終わりました。2012年の8月と9月、二か月に渡って私は戦災の体験者のお話を聞き、それをインベストライフに掲載しました。戦後80年目の今年、戦争を体験した方々も減っていらっしゃいます。インタビューをさせていただいた方の多くも鬼籍に入られています。この時の取材は非常に価値あるものだったと自負しています。ご協力いただいた方々の体験を風化させないためにも今月と来月のインベストライフではその時の取材記事を再掲させていただきます。ぜひ、お読みください。（なお、記事は私が取材録音したものをできるだけ忠実に文章にしたものです）

インベストライフ誌8月号に続き今回はその二回目です。

「水が欲しい」と子ども達にせがまれても一滴の水も無い。まわらぬ口で洋がブーブーするので唾でも飲ませてやろうとするが、いくら努力しても口の中はカラカラで喉が引きつるだけ。隣の人の水筒にはまだ水が入っているだろうか？こんな時には「下さい」とも言えない、人の事より自分が大切なものだ。男の人がいてくれたらなあと思う。子どもが泣き、その体に巻き付けておいた着物も邪魔になり一枚一枚脱ぎ捨てた。腕に付けていた時計も取ってしまう。何だか頭がボーとしてきた。思ってもいない事が口から出る。それがおかしくて笑う。他人が見たらまるで気違いだ。（本文より）

9月号掲載　（後半）

- 初めて見る日本は緑がきれいだった　鳥山百代さん
- 1941年に哈爾濱（ハルピン）で体験した敗戦　宮崎一幸さん
- 後記にかえて 対談：島田知保さん、岡本和久

8月号掲載　（前半）

プライバシー・利用規約

- 壮絶な引揚げ、極貧の戦後を生き延びてつかんだもの 上田卓さん、上田早苗さん
- 若いときの苦労は買ってでもしろ！　田中義博さん
- 空襲敢闘記 岡本 茂和（岡本の父の手記）

改めて取材原稿を掲載するにあたって（岡本の感想）

戦後80年、日本は幸いなことに戦争に巻き込まれることもなく平和に過ぎました。しかし、アメリカを考えてみるとこの期間に参戦したものでも朝鮮戦争（1950～53年）、ベトナム戦争（1960～75年）、湾岸戦争（1990～91年）、アフガニスタン戦争（2001～21年）、イラク戦争（2003～11年）の戦争があり、さらにキューバ危機、グレナダ侵攻、コソボ紛争、リビア空爆、シリア内戦、最近にはイラン空爆などの軍事行動がありました。当事者国では多くの悲劇が起こっていたと思います。

それに比べ日本は終戦から朝鮮戦争の特需をテコに神武、岩戸景気で成長路線に乗り、いざなぎ景気の高度成長を遂げました。そしてバブル時代を経て長い構造不況、そしていま新しい時代のサイクルに入っているように思われます。私自身、戦後の78年を生きてきてやはりいま大切なのは危機感をもって大きな変革を実行することだと思います。それは平和な80年を与えられた我々の未来の人々への御恩返しではないでしょうか。

9月21日のサロイン塾では上記のような出来事を背景に明治時代からの証券市場がどのように変遷してきたかをお話します。また子供にお金、投資をどう教えるかという23年の経験に基づくお話もします。（完全ネット開催、無料、質疑応答あり　お申込：https://business.form-mailer.jp/fms/9a267cb3301880）。ご気楽にご参加ください。

FIWA主催のセミナー情報

下記のサイトをご覧ください。

みんなのお金のアドバイザー協会～FIWA
セミナー案内

今月号の記事をすべてダウンロード

このページを印刷する

カテゴリー 今月のひとこと
タグ 【Vol.273】2025年09月15日発行

みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2025年9月10日

FIWAサムライズ勉強会

【Vol.273】FIWAサムライズ勉強会より

「お金のクセ」を知ると、人生が動き出す ファイナンシャル・セラピーが教えてくれる「心とお金の整え方」

上原 千華子（うえはら ちかこ）氏
FIWA正会員・金融教育家
(株)ウェルス・マインド・アプローチ代表取締役

上原 千華子氏

心とお金というテーマを科学的にひもといていきます。それでは始めにこの問いからスタートします。「皆さんにとってお金と付き合うとはどんな状態だと思いますか？」お金の使い方には感情や価値観が現れます。「貯めたいのに使ってしまう。」「将来のために不安で動けない」というような気持ちになることは、自分の意志が弱いからではありません。 実はこうした気持ちの背景には感情や思考の癖が深く関わっていることが多いのです。大事なことは、自分の感情や癖を理解した上で整える視点を持つことです。

感情や行動、社会性の観点からみてみます。感情の部分は、不安、罪悪感、喜び、満足感など、お金に対する心の反応です。 行動は、お金に対する行動をいいます。具体的にはお金を使う、貯める、増やす、管理する、人に与えるなどです。また、お金は社会性も関わってきます。自分だけではなくて家族や社会への経済的な影響があります。今日は単にこうすれば貯まる、増えるという話ではなく、私らしく納得して使える。そんなお金との付き合い方を感情、脳の癖、行動経済学などの視点から一緒に探っていきます。

今日のゴールは、お金の悩みの裏にある感情に気づいて、お金と向きあう3つのヒントを持ち帰っていただきます。まず 1つ目、知識だけでは動けない理由が分かります。 2つ目、あなたのお金の癖に気づきます。3つ目は明日からできる変化のヒントを見つけてもらいます。誰かの正解ではなくて、自分にとって納得を見つけていただくことが大切です。心とお金の両方にフォーカスするのがファイナンシャルセラピーという新しいアプローチです。それでは「なぜ知識だけでは動けないのか」行動できない理由に迫っていきます。

お金に限らず、知識があっても「自分は変われないなと感じることはありませんか？」その理由の1つが私たちの無意識に染みついた癖です。知識、情報があってもなぜか動けない。それは感情のブロックがあるからです。これは、主に不安、恐怖、過去の記憶や経験が元になっています。行動を変えるためにはまず自分のお金の癖を知ることが大切です。 そして次に、自分の感情に気づくことで行動が変わりやすくなります。

ではこのお金癖の根っこにあるものとはどういうものでしょうか？老後が不安だとか、このままだとちょっとお金を使いすぎたかなということはありませんか？老後が不安というのは、年代に限らずある悩みだと思います。お金の悩みの多くは、知識よりも感情の問題とも言えます。感情は行動に直結します。この感情とお金をつなぐ学問が

プライバシー・利用規約

ファイナンシャルセラピーです。ファイナンシャルセラピーとは、簡単に言うと心理学と脳科学、お金の知識を掛け合わせた新しい分野です。

ファイナンシャルセラピーではお金の行動を変える前にまず心を整えることを大切にしています。心が整うと感情に振り回されることが減ります。そして判断力が増して行動が変わり、結果として家計にも好循環が生まれる。感情・判断力・行動・家計の4 つの変化が循環していくわけです。それは単に行動の問題ではなく、その背景にある感情や思考の癖が影響している場合が多いのです。金融の知識やテクニックも必要ですが、自分のお金の癖に気づいて感情の整理をすることでお金の扱い方が変わり自分らしい選択がしやすくなります。整った心にお金は自然と流れ始める。それがファイナンシャルセラピーの目指す姿です。

このようなお金の癖は、どのような仕組みでできているのでしょうか？自分は考えて決めていると思っていても、実は脳は過去の経験や感情、習慣に基づいて自動的に選択していることが多いようです。頭で考えて買うか我慢するか決めているつもりでも、実は9割以上は無意識による判断と言われています。過去の自分の癖や記憶が無意識に働いて脳はすでに自動で選択するモードになっています。つまり自分という頭でよく考えているつもりでも、なぜか知らないけれどこんなことしちゃったということがあるということにまず気づくことが行動を変える第1歩になります。

それではこのお金の癖は、いつどのように身につくのでしょうか？実は多くの研究で金銭感覚の土台は9歳頃までに形作られると言われています。スキャモンの発育曲線は、人の体や心がどの時期にどのくらい成長するものかを示しています。中でも神経型、つまり脳や心の土台は6歳から9歳で一気に発達をして、この時期に価値観や行動パターンが芽吹きやすい。この頃の脳は周りの言動をスポンジのように吸収します。

例えば親が「うちはお金がない」と口癖のように言っていると子供は無意識に「お金＝不安なもの」とか、「お金は足りないもの」とインプットしてしまいます。このようなお金に対する前提というものは大人になってからのお金の使い方や判断にも影響を与えていることがあります。だからこそ自分の行動にモヤモヤしたときに、過去の前提に気づくことがお金との付き合い方を整える第一歩になります。

講演では、なぜお金の悩みにセラピー視点が必要なのかを事例とワークを交え、わかりやすく解説。最後にお金の癖は直すのではなく整えることが大事であり、小さな成功体験がお金の自信を育て、明日の行動を変える一歩となると結ばれました。

このページを印刷する

カテゴリー FIWAサムライズ勉強会

タグ 【Vol.273】2025年09月15日発行

みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2025年9月10日

寄稿

【Vol.273】エクスパート・オピニオン

Expert's View：
トランプ関税でどうなる、アメリカ、日本、世界

ブーケ･ド･フルーレット代表
米国CFA協会認定証券アナリスト
馬渕 治好氏

（この対談は2025年8月19日に行われたものです）

岡本：インベストライフで毎回、Expert's Viewという有識者のコメントを紹介しています。今は当然、「トランプさん旋風で世界、アメリカ、日本、政治、経済はどうなるの」というのは非常に、多くの人が興味あるところです。そこで、馬渕さんの意見を聞かせてもらいたいと思ったわけです。今回は一番、大きな話題になっている関税の問題についてお話を伺います。

関税の問題とか、それから国際関係の問題とかあるんだけれども、その辺の質問も多いと思います。皆さんにはどんな話をしているのですか。

馬渕：そうですね。関税だけで言えば一時懸念されたほどではないにしても、就任前よりは上がるわけですね。全世界に無差別に10%かけるという形であったり、品目別にも鉄鋼、アルミなどに50%かけたり、今度、半導体だの、医薬品だの、銅だの、木材だのを加える意向だと言っています。半導体はおそらく8月中に大きな方針が出るのではないかと言われています。そうするとやはりアメリカにとってはコストが高くなり、その分だけ経済が圧迫され、景気が悪化する方向と、値段が上がる方向という両面で警戒する必要があると思うんですね。

岡本：日本がアメリカ政府に直接関税を払うことはないですよね。そうすると日本からの輸出に関税をかけるというのはどのようなメカニズムですか。

馬渕：つまり、日本などの輸出元が価格を変更せず、関税を支払うアメリカの輸入業者が関税の分を含めてアメリカで売れば値上がりします。最終製品だけではなく、原材料とか、それから部品も海外で作ってアメリカに輸入している分もあります。これらにも輸入関税がかかります。それがアメリカでの物価上昇になります。

岡本：要するに、輸入価格に変動がなければ輸入販売業者の手取りが減ってしまうということですね。

馬渕：そうです。アメリカの輸入業者が関税を価格に転嫁せず、アメリカ国内での販売価格を変えなければ、その分、業者の手取りが減ります。あるいは、輸入業者が関税分を国内での販売価格に転嫁すれば、購入者であるや家計にとっては、実質的に手取りが減る（価格上昇による実質所得減価）という形になります。

プライバシー・利用規約

岡本：そうすると日本の輸出業者に日本からの輸出価格を下げろという圧力はかかってきますよね。

馬渕：それはかかってきます。圧力がかからなくても、価格が上昇することによって数量ベースで売り上げが落ちることが懸念されます。もしくは米国企業にシェアを奪われてしまうことを懸念して、自主的に日本に限らず、輸出元が価格を下げるということもあると思います。米国企業からの値下げ圧力が高まりますから。そうなれば、今度は輸出元の国の方が景気、企業収益が圧迫されることになります。結局、世界的にやはり景気を下げるようになると思います。

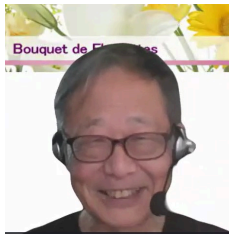
今のところ、株式市場はあまりそれを気にしていない感じがしますが、その一番の要因は、例えば、現時点でアメリカの経済統計とか物価統計を見ると、若干、経済指標が弱くなったり、もしくは物価指標がじわっと上がったりはしてるのですが、それほど深刻な影響が出ていない。だから、これからも深刻な影響は出ないのであろうという楽観論が強いように思いますね。

ただ、なぜ現時点でそれほど深刻な影響が出ていないかというと、関税が上がるということは以前から分かっていたので、関税が上がる前に十分に輸入して在庫に積んでしまおうというような動きがありました。また、需要面では、特に自動車などについては3月に販売台数がとても増えて、その後、落ち込んでいるのです。要するに、値上がりする前に買ってしまおうという動きが出たわけですね。

かけ込み輸入の分だけ今、安い在庫品を売っていれば物価上昇につながりにくいというのもありますが、だんだん在庫の底はついてきている。そうすると、新しく輸入した高い輸入品を売らなければいけなくなるので、物価にはこれから影響が出ます。実は先週、生産者物価指数が発表になりました。この川上物価の方は3%を超える前年比での上昇です。こういう上昇になっても川下の消費者物価指数の方は3%をやや下回り、それほどブレていないのです。ただ川上から川下に物価上昇が伝播してくると、これから厳しいことになるのではないかなと思います。

それと、例えばアトランタ連銀が企業にアンケート調査をしています。今までどのくらいコスト上昇を価格転嫁したかではなく、「2025年中にどのくらい価格転嫁する予定ですか」というアンケート調査をしたのです。それによると年内、価格転嫁するうちの何パーセントが関税によるコスト上昇分の価格転嫁かという数字を全部平均すると58%。つまり、58%を最終的に今年中に売価に転嫁するということを言っています。

岡本：要するに、それはアメリカ企業が負担する関税上昇分の58%、それを価格に転嫁していくということですね。



馬渕：それはアトランタ連銀の調査なのです。アトランタ連銀の管轄地区は、アメリカの東南部、フロリダなどの地域です。その地域の企業だけに行ったアンケート調査ではあるのですが、ただ、それと全米の意向が全く異なるということはないと思います。

それから先週報じられたゴールドマン・サックスのレポートでは、同じように関税引上げによるコスト上昇のうち、現時点で何%を最終事業者に転嫁しているかという調査によると、6月時点での転嫁率は22%です。しかし、これが年内に67%になるという。そのような独自の調査レポートを書いたのですね。この67%という数字と、さっき申し上げたアトランタ連銀の58%と数字は大きな違いはないので、大体そんな感じになるだろうとは思いますね。

岡本：私が制度的によく分からないところがあるのは、例えば日本からの輸出価格が100だとしましょう。それをアメリカに輸出すると、関税率が15ならアメリカの輸入業者は当然、関税の15の部分は政府に納めなければならない。全部ではないにしろ関税分は値上げ圧力となるでしょう。そうするとそれはアメリカでの輸入物価の上昇になりますよね。

馬渕：それをそのまま115で売るのであれば特に負担は輸入業者にとってはないんですけど、それを115で買わなければいけない企業や家計にとっては負担になりますね。

岡本：そうすると値段が上がると。

馬渕：値上げと同じになります。値上げを避けるとすれば、アメリカの輸入業者は15余計に払っているのだから自分の利益で負担します。そうすると15乗せないで売るかもしれませんし、もしくは例えばトヨタが自動車を直接アメリカに輸出しているということなら、アメリカでの価格が関税込みで値上がりする。値上がりによる数量ベースの売上の落ち込みを避けるために輸出価格を98とか95にすることになれば、その分だけ値上がりは抑えられますね。

岡本：日本の輸出業者は87（＝100÷1.15）で売ったとしましょう。そうすると、アメリカの輸入業者は関税を政府に払うために税込価格を販売価格にするわけですよね。そうするとアメリカ国民にとってみると、前から100で買ってた物は引き続き100（＝87×1.15）で買えるってことにならないですか。そうすると損するのは日本の企業が関税分を負担していることになり、輸入企業の採算はニュートラルということになるのでは？

馬渕：それは関税のコストを輸入業者がかぶるか、もしくはトヨタがかぶるのかということでしょう。日本の業者が全部関税分をかぶればアメリカ最終事業者にとっては、値上がりはなくなります。

岡本：要するに政府は関税分だけ税収が増える。その負担を日本の輸出企業が負担するか、アメリカの輸入業者が負担するということですね。または全部あるいは一部をアメリカの消費者や最終購入者の企業が負担する。そうですよね。

日本からの輸出企業がコストを下げ輸入企業が支払う関税分を値下げするか、あるいは日本企業は値下げせずアメリカの企業や家計が関税分をすべて負担するか、そういう両極端があり、結局、両者の力関係で落ち着くところに落ち着くということですね。

馬渕：そうですね。今の段階では分からないのですが、日本に限らず、輸出元の方がいくらかかぶるという話はきてますね。

岡本：なんとなく、そんな感じはしますよね。やっぱり生産側は稼働率を保つというのは事業としてすごく重要だと思うし・・・

馬渕：そうしていくばくかを輸出元の日本企業などがかぶる。トランプさんはそこを強調して「全て他の国がかぶるのである」という言い方をしています。「だからアメリカの負担は全くなしである」ということを言っていますが、それもまたちょっと極端で、やはり全部はかぶれないでしょう。

最終的なアメリカでの売値が上がって、それで「売れ行きが少し悪くなってもしょうがないよね」と、それは売っている製品の非価格競争力がどのくらいあるかというところによるでしょう。今のところは全部じゃないですけど、一番最初の売り元、海外のメーカーなどがかぶるのもあるのではないかと思います。

岡本：ありがとうございました。次回はやはりトランプさんの金融面の考え方のお話を聞かせてください。

このページを印刷する

カテゴリー 寄稿

タグ 【Vol.273】2025年09月15日発行

FIWA通信
インベストライフ®

2025年9月10日

寄稿

【Vol.273】寄稿 Happy Birthday, FIWA！

FIWA、６歳の誕生日によせて

FIWA みんなのお金のアドバイザー協会®
会長 岡本和久

みなさん、こんにちはFIWA会長の岡本和久です。

「みんなのお金のアドバイザー協会～FIWA」が設立されたのが2019年9月24日ですからあと何日かで6歳になります。６歳と言えば生まれた赤ちゃんが小学校に入る時期ですね。

この6年間、外部環境も非常に大きく変化をしました。そしてもちろんその中でFIWAの活動も益々、重要性を増してきています。外部環境で言えば、資産運用に関する国家の方針が、「資産運用立国」ということで明確になってきたことだと思います。J-FLECのような新しい組織もできて、ともすれば「怪しげ」なイメージもあった投資というものがかなり改善されてきています。「つみたて投資」という言葉も多くの人が知っているようになっています。

同時に、もう一つ重要なのは、株式市場動向です。株式市場は昨年2024年2月に日経平均で見て最高値を更新しました。その後も不安定な展開ではありますが、やはり日経平均が新値を更新したということも投資マインドをかきたてている一因であると思います。

一方、私が見ているところ、どうも国家の方針、そしてマーケットの状況が好転したといっても、相変わらず「売った、買った」中心の「投機」が「投資」だと思っている人も多く、しかも、金融商品を販売する側主導の投機が目立つように思います。

本来、資産運用は、目先、どの株が上がるかとか。今は売りか買いかというようなことではなく、**「将来の自分を今の自分が支える」**ことを目的として長期にわたり資産の運用を続けるべきものです。積み立て投資などをしている方は少しずつわかってきているように思いますが、まだまだ本当には浸透していない。相変わらず「つみたてNISAってもうかるんですか」とか「やった方が良いんですか」などという質問も良く聞きます。

株式投資というと、やはりお小遣いを設けたいという人も多いわけです。本当にこれから重要なことは、株式市場がある程度、天井をつけた感じになり下落局面になった時です。せっかく続けてきた積み立て投資をやめてしまう、「やっぱり株なんてやらない方が良かった」と積立てを止めてしまう。あるいは地道に積み立てていた人が

プライバシー・利用規約

もっと儲かりそうな目柄に飛び移ったりする。そんなことも非常に多く出てくることだと思います。でも、積立投資をしている人にとっては下落局面こそコストの安い投資ができる好機なのです。

その意味で、私はFIWAにとってこれからの役割が本当に大事だと思っています。FIWAのホームページの最初にでビジョンとミッションが明確にされています。是非、それをよく読み「腹落ち」してください。

FIWAのビジョン

当協会は、生活者が**経済的束縛から解放**され**豊かで幸せな人生**を実現できるための支援活動を行います

FIWAのアドバイザーのためのミッション

生活者のためのライフプラン、金銭、投資、資産運用等に関するアドバイスが完全に利益相反のない形で行われ、当協会の理念に基づき行動するお金のアドバイザーを育成、認定、支援する

生活者のためのミッション

生活者のためのライフプラン、金銭、投資、資産運用等に関するアドバイスが完全に利益相反のない形で行われ、当協会の理念に基づき行動するお金のアドバイザーを育成、認定、支援する

少し儲かったから、そのお金で何かおいしいものを食べるとか、どこかに旅行に行くとかいうことではなくて、やはり人生というものを視野に入れて、お金の面での制約をできるだけ最小化し、豊かで健康でしあわせな人生を生活者のみなさまが送れるための人生の伴走者になることこそアドバイザーの役割です。

FIWAというこの4つのアルファベットの文字に我々の理念が集約されています。

Fは**Fiduciary**。相談者の利益のために忠実なアドバイスを行う。 Iは**Independent**。利益相反の全くない独立したアドバイス。そして3番目のWは**Wealth**。ライフプランに基づく資産全体のアドバイス、そして4番目が**Advisor**、知識、経験、倫理観と行動規範に基づく専業のアドバイスアドバイザーということです。こういった理念に基づいて我々は今、アドバイザーという本当に価値のある新しいビジネスを作り出そうと考えているわけです。

是非、一人でも多くの人がFIWAというNPOの存在意義を理解し、さらに多くの人と理念を共有し、そしてみんながゆたかでしあわせな人生を送れるよう力を合わせていきましょう！

このページを印刷する

カテゴリー 寄稿

タグ 【Vol.273】2025年09月15日発行

みんなのお金のアドバイザー協会
FIWA通信
インベストライフ®

2025年9月10日

お役立ち情報

【Vol.273】お役立ち情報

SNS、PODCAST等
ホームページ、メルマガ、ブログなど、お役立ち情報

びとうファイナンシャルサービス　尾藤峰男氏のブログより非常に有益なコメントですので掲載させていただいています。

私の長年の友人、尾藤峰男さんはCFA、CMA、CFPの全レベル、すべて一回で合格しているすごい人です。尾藤さんのブログは毎回、非常に示唆に富んだ有益な内容です。インベストライフに掲載することを了解してもらいましたので皆さんにご紹介します。

http://www.bfsc.jp
－日米の寄付文化の違いは、国の土台作りに深くかかわる－

アメリカの富豪による寄付活動を見てみると、日本とかなり違う状況が見て取れます。それが、国の勢い、持続的成長にかなり影響しているように感じます。そのあたりを、今週はじっくりと見てみましょう。

□ 米国の寄付活動は、富豪の義務とみなされる

バフェットは2006年から寄付を始め、これまで600億ドル（約9兆円）以上を寄付しています。そして、遺言で、2000億ドル（約30兆円）にのぼる財産のほとんどを、寄付するようにしています。また、マイクロソフト創業者のビル・ゲイツも、世界の医療環境の改善を図るゲイツ財団に対して、これまで約600億ドル寄付しています。そして今後20年で、財産のほぼすべての2000億ドルを寄付するとしています。またこの二人は、2010年に「ギビング・プレッジ」を立ち上げ、世界の億万長者に対し、生前もしくは死後に財産の過半数を慈善事業に寄付することを約束するよう呼びかける取り組みを始めました。現在までに400名以上が署名し、その総資産は約1兆ドルに達しています。

古くをさかのぼれば、19世紀のアンドリュー・カーネギーは「富の福音」という論文で「巨万の富を築いた者は、その富を社会に還元する義務がある」と説き、現在の価値で約5兆円を寄付しました。ジョン・D・ロックフェラーも同様に、石油で築いた富の大部分を教育や医療分野に投じています。その活動は、いまでもロックフェラー財団として、活発に続けられています。

□ 日本の寄付活動は、米国にくらべ桁が違う少なさ

そして、かたや日本。日本の個人寄付総額はGDP比で約0.1%と、アメリカの約2%と比較して圧倒的に低い水準にあります。日本での大富豪といわれている孫正義さんの寄付額は、公表されている限りでは、東日本大震災時の100億円、ユニクロの柳井さんも、学術支援として100億円程度。とはいっても、寄付していただいているこ
は、とてもありがたいことです。

プライバシー・利用規約

□ 日米の違いは一体どこにあるのか

米国の場合は、マックス・ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で言っていますが、「富裕になったものは、恩恵を増し加えられて天国に宝を積むために、出来るだけ他に与えなければならない」という精神なのです。また、アメリカ特有の「ノブレス・オブリージュ」の思想があります。これは、フランス語由来で「高貴なる者の義務」を意味し、富や地位を得た者には社会的責任があるという概念です。こちらも、アメリカの富豪の寄付文化の根底にある思想です。

一方、日本の場合は、隣組や互助的な「講」や「頼母子講」といった共同体内での助け合いが主流だったのです。共済会、協同組合、歳末助け合いは、長年にわたり根付いています。与えるではなく、支え合うという方向に向かったということです。

税制面でも差があります。アメリカでは寄付による所得控除の上限が調整総所得の60%まで認められるのに対し、日本では所得控除と税額控除のいずれかを選択できるものの、上限が比較的厳しく設定されています。（所得控除は、総所得金額の40%、税額控除は、所得税額の25%）

□ この寄付活動がどう国力に影響するか。

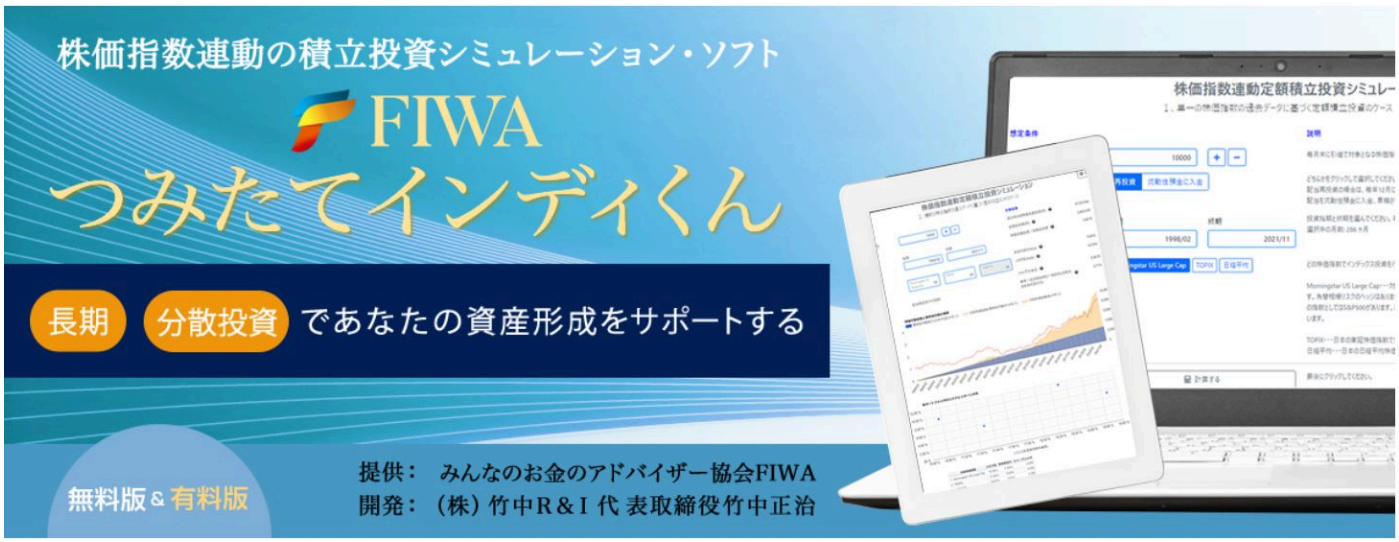
アメリカでは、富裕層からの大規模寄付が大学や研究機関の財政基盤を支え、スタンフォード大学やハーバード大学などの私立大学が世界最高水準の研究環境を維持しています。これらの大学から生まれるイノベーションが、シリコンバレーをはじめとする産業クラスターの形成を促進し、持続的な経済成長の源泉となっています。

また、慈善財団による社会課題解決への投資は、新たなビジネス分野の開拓にもつながっています。ゲイツ財団による保健医療分野への投資は、グローバルヘルス産業の発展を後押ししました。例えば、ワクチン普及を目指すGaviアライアンスへの16億ドルの寄付や、エイズ・結核・マラリア対策基金への数十億ドルの拠出により、途上国の医療インフラ整備が加速しています。

いわゆる基礎の部分で、アメリカの場合、寄付文化が大きな役割を果たしているのです。経済発展の観点から見ると、日本でも寄付文化の醸成により、大学研究の独立性向上、スタートアップエコシステムの充実、社会的企業の育成などが期待できます。特に、少子高齢化や地方創生といった課題に対し、民間資金の効率的活用は重要な鍵となるでしょう。

文化的背景の違いはありますが、日本独自の寄付文化を育てることが、持続可能な経済成長への新たな道筋となるでしょう。

FIWA正会員 小谷晴美さんの生活に密着した情報紹介



FIWAと竹中教授が開発・運営する積立て投資の様々なシミュレーションができます

証券アナリストジャーナルの記事の要約を紹介してくださっています

CFA Society Japan

CFA協会ブログ

グローバル最先端のアナリスト（CFA）が執筆している興味深い記事の日本語訳です

1973年創刊の長期投資仲間通信　現在、FIWAのWebベースの会報誌。一切、金融商品販売から独立した記事を掲載しています。

ファイナンシャルヒーラーの雑談トーク

https://open.spotify.com/show/0PbvVeZmB0ycyZnPOR98ay

80回目の終戦記念日に寄せて
8月16日・ファイナンシャルヒーラーの雑談トーク
Spotifyで保存
10:13

マネーマネーマネー for you – FIWA～みんなのお金のアドバイザー協会～

マネーマネーマネーfor you

FIWA（みんなのお金のアドバイザー協会　https://fiwa.or.jp/）に所属するコヤ（小屋）＆キャサリン（竹内）＆ナンシー（西岡）の3人の子育て中パパママがお届けする「お金」と「子育て」と「人生」に関するよもやま話をお届けするラジオ
https://fiwa.or.jp/podcast/

FIWAサロイン塾

第四回　7月20日13：00～14：30

1. 投資信託を学ぶ
2. 投資のコストにご用心
3. 求める投信の見つけ方

20250720 saroin④ Speech

このページを印刷する

カテゴリー　お役立ち情報

タグ　【Vol.273】2025年09月15日発行

「長期投資仲間」通信 for a Better Life
インベストライフ®

9 2012.SEP
Vol.117

今月の表紙：「果実を味わうために、しっかりと種を植えよう」作・渋澤　健

今月のひとこと・・・

夏が終わると急に地球の回転が速くなるような気がします。これから4カ月、11月の米国大統領選、日本の政局、ヨーロッパの経済問題など大きな変動が続きそうです。引き続き「楽観」と「悲観」が目まぐるしく繰り返すことになりそうですね。こんなときこそ、目先の出来事にとらわれず腰をどっかりと下ろして「初一念」を貫き通したいものです。

特集

生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（後編）

岡本和久

先月に続き、戦中・戦後の体験談を伺いました。痛感するのは、いかにわれわれがいる現在の環境が恵まれているかということです。このありがたい環境でいかに「生き延びる力」を磨くかというのは大きな課題です。せめて、あらゆることにチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思います。最後に島田知保さんと対談をさせていただきました。

その他にもこんな記事が

- 達人たちの投資哲学を学ぼう
  冒険投資家～ジム･ロジャーズ　岡本 和久
- 解析マーケット～シカゴの風
  大統領の条件と二大政党制の起源　滝澤 伯文
- 今月のミニ対談　年金運用革命の黎明期を語る
  森本紀行氏VS岡本和久
- 経済のギモンに答える　米大統領選について～オバマ優勢だが、議会選挙の結果も注目　馬渕　治好
- IOWAたより　レポーター　川元　由喜子
- セミナー等のお知らせ
- 長期投資家のためのアナリストぷち講座
  『インドへの投資機会（2）』速水 禎
- 考察●長期投資の実践　投資先に責任を持とう
  澤上 篤人
- 中国がわかるシリーズ　中国は“九州”から始まった
  出口　治明
- 投資の話アラカルト　積極型投信のコストと運用パフォーマンスとの関係　尾藤　峰男
- クラブ･インベストライフ@Facebookより

インベストライフ2012年9月号　Copyright © I-Oウェルス･アドバイザーズ株式会社

生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（後編）

岡本 和久

先月に続き、戦中・戦後の体験談を伺いました。痛感するのは、いかにわれわれがいる現在の環境が恵まれているかということです。このありがたい状況で、いかに「生き延びる力」を磨くのかというのは大きな課題です。せめて、あらゆることにチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思います。最後に島田知保さんと対談をさせていただきました。

鳥山百代さん

現在、83歳の鳥山さんは京城生れです。今はお孫さんたちに囲まれ、相変わらず活発に活動されています。しかし、まったく普通の「女の子」が体験した戦中と戦後は想像を絶するものでした。

初めて見る日本は緑がきれいだった

私は1928年（昭和3年）に京城、現在の京城（ソウル）で生まれて、今年で83歳になります。父は広島安芸吉田の農家の四男で、新天地を求めて韓国に行き、製麺業を始めました。当時、韓国は日本でしたからね。母は17歳で広島から京城へ行き、8歳年上の父と結婚したそうです。仕事が軌道に乗るまでは二人ともずいぶん必死に働いたようです。京城にあった三越にも麺を卸していたと聞いています。

私が終戦を迎えたのは17歳でしたが、それまでは実に満ち足りた生活を送っていました。百（もも）お嬢様と呼ばれて、使用人もたくさんいました。私が通った小学校は日本人だけで、明洞（ミョンドン）に近い南山という所にある学校でした。韓国の人たちともごく普通に付き合っていたと記憶しています。もちろん、日本人は支配する側でしたから、肉体労働などはせず、もっぱら韓国の人がするというようなことはありましたけれどね。

警戒警報や空襲警報が時々鳴ったり、偵察機などが来たりしましたが、実際に爆撃されることはありませんでした。しかし、灯火管制はありましたし、家には細菌戦に備えて防毒マスクなどもありました。

私は五年制の高等女学校に通っていましたが、昭和20年、繰り上げ卒業といって4年生の私も5年生と一緒に卒業させられました。玉音放送のあった8月15日は、進学した女子専門学校の夏休みでしたので家にいたのですが、ラジオの電波の状態が悪く、「以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」というところしか聞こえませんでした。でも、なんとなく「敗けたんじゃないかな」ということはわかりました。

役人や知識人の中には敗戦の前に荷物を日本に送り、ご自身も日本に帰っているという人もいたようです。でも、私たち一般人は報道を信じ、ある意味洗脳されていましたから、呆然とするばかりでした。そうしているうちに韓国の人たちが「マンセー、マンセー」と町で騒ぎだしました。勝利を祝っていたのでしょう。

姉と私は何をされるかわからないというので、家の中に囲われてしまいました。押入れに抜け穴を造ったりしました。流言飛語が飛び交い、みんな警戒していました。外へ出ないので社会の様子はあまりわからなかったのですが、デマもかなりあったと思います。ソ連や満州まではある程度の距離があったので、比較的秩序だっていたのではないかと思います。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

姉が徴用逃れで海軍関係の職場に勤めていました。幸いなことにその関係もあって、引き揚げ列車の切符が意外に早く手に入りました。とにかく住んでいる所が日本ではなくなってしまったので、そこには居られないのです。仏壇とか、神棚、おひな様などを庭で燃やしましたが、人形（ひとがた）のものを燃やすというのは忘れられない記憶ですね。

一人が持って帰れる荷物は手で持てる範囲に限られていました。私は大きなリュックサックを持ちましたが、母は喘息の真ん中の弟をおぶっていたのでリュックを持つことができません。一番下の弟は小学校低学年なので大きな荷物は持てず、本当に大事な物だけを持って帰るだけでした。写真はアルバムから剥がして持ち帰りました。

当時、かなりのおカネを出せば、闇ルートで荷物を運んでくれる「闇船」というのがありました。両親はそれで荷物を送ったのですが、帰国後、ずっと首を長くして待っていましたがとうとう届きませんでした。

帰国するまではやかんと飯盒、お米を持って歩いていました。釜山で20日間ぐらい引揚船を待ちましたが、その間は本当に難民でしたね。満州から逃げてきた軍人さんたちがかなりいたのですが、その人たちは身ひとつで逃げているので荷物がありません。それで頼むと持ってくれたのです。それは本当に助かりました。もちろん食べ物の差し入れなどはないですから、みんな、自分で食べ物を調達していました。まあ、おカネを出せば買えたということでしょうね。

母はかなり不利な闇レートで日本円に交換をして、それを日本に持ち帰ろうとしました。おカネを持ち帰る方法については水筒の中に入れるとか、いろいろな話を聞きましたが、誰でも気づく方法はみんなバレてしまいます。船に乗る前に全員が身体検査をされるからです。女性の場合、韓国の女性が身体検査をしました。母は身体検査で見つからないようにするため、段ボールの波の部分を切ってそこにお札を入れ、糊で貼り直してトランクのような形にして持っていました。

幸い見つからずに持ち帰れた何万円かのおカネは、帰国後非常に役立ちました。当時のおカネで家が十分に建つ金額ぐらいありました。まだ戦時中の昭和17～18年ごろでしょうか、5000円を日本に送金してそれで田畑を買っておいたぐらいですから、数万円というのは大変な金額だったのです。

帰国後、その田畑で採れたもので、十分ではないけれど家族8人が芋粥で糊口をしのぐくらいのことはできました。帰国した年もちょうど9月に帰ったので、現物で小作米が入りましたから、それは助かりました。

興安丸という船で日本に帰ったのですが、船に乗ったときに船員さんが「お帰りなさい、もう大丈夫ですよ」と言ってくれたことが本当にうれしかったです。安堵感、もう大丈夫だという思い、これは筆舌に尽くしがたいものでしたね。私たちは子どもでしたが、両親はもっとホッとしただろうと思います。一晩で玄界灘を越えて、山口県の仙崎の港に着きました。本当に緑がきれいだなと思ったのを覚えています。緑のなかに柿の実がなっていた。それが印象に残っています。

そして、驚いたのはすげがさに絣（かすり）の着物で日本人女性が肉体労働をしている姿を見たことでした。それまでは肉体労働をするのは韓国の人で、日本人が働くのを見たことがなかったのです。「日本人がこんなに働いている」ということが驚きだったというのは、今から考えると恐ろしいことでもありますね。それから、日本にはどんな山間部に行っても立派な小学校がある、韓国では当時、小学校は義務教育はなかったと思いますので、日本での教育の普及ぶりがよくわかりました。

仙崎から下関まで貨物列車で移動、山陽本線で広島まで来ました。印象深かったのは徳山の海軍工廠が全滅していたことでした。そして、被爆後の広島に到着しましたが、そこは焼け野原。何にもない。福屋というデパートの残骸が見えるだけでした。放射能が出ているかもしれないといううわさがあり、汽車に乗っているときは絶対に外に出てはだめだと言われました。

広島の少し先の祖母の家で一泊しました。そのときに着物を脱いで、五右衛門風呂で着物を煮沸したのを覚えています。シラミを除去したのです。シラミがいっぱい体についていたのです。そのときに裏の山で大きな次郎柿がなっていました。なぜかはわかりませんが、娘心に日本中どこにいっても柿があるというのが印象的だったようです。韓国では街中に住んでいましたからね。

韓国では親戚がほとんどいませんでしたから、日本に帰ってきて、親戚の子とはすぐに仲良くなりました。祖母が「やっぱり血のつながったものだのう」と言ったのも記憶に残っています。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

最終的には父母のふるさとの吉田に着きました。父の兄が大八車を引っ張って迎えに来てくれ、「これからは荷物を背負わないでいい」と言われたのがとてもうれしかったです。それで祖母の本家の一部屋でお世話になることになりました。四畳半一間、そこに8人が寝起きしていました。隠居所でしたがお勝手などちゃんと独立して生活ができるようになっていました。冬はあんかに足を突っ込んで、みんなが放射線状になって寝ていました。

父は京城にいるときから呆然状態でした。すべてを失ってしまったのですから無理もありません。でも、先ほどお話ししたように、米だけは買っておいた田畑で収穫がありました。しかし、牛を持っていません。肩身が狭いというか、牛を借りたら、何日分かの労働力で返さなければならないのです。田植えは共同作業です。そのなかで牛を持っていないということでばかにされる。だんだん、厄介者を抱え込んだということで祖母の立場が苦しくなる。気の毒だというので、姉は大津の東洋レーヨンに職を見つけて出ていきました。

私は広島女専への転校試験を受けて合格をしていました。しかし、親から「男の子が3人いるから、悪いけど女のあなたは進学をあきらめてくれ」と言われました。母は泣いて頼むのです。「それならどうして転校試験を受けさせたのだ」と思ったものです。一週間ぐらい泣きあかして、そして進学をあきらめました。

長男は学費のいらない師範学校に行き、卒業してから東京の江戸川区の学校の先生になりました。そのまま田舎にいても将来性がないですから、それを機に田畑を売ってみんなで東京に出てきました。それで家族全員で働き、下の弟は奨学金をもらって何とか家計が安定してきました。父母は子ども相手のお菓子屋を営みながら、つぼ焼き芋を売ったりして生活を支えていました。貧しいなかでも借金などはなく、質屋にもいかなかった。進学をあきらめた私は、健康保険組合で経理の仕事をしていました。みんな、とにかく必死に働きました。

今、私が一番感じるのは、教育の恐ろしさということです。私たちも言われるままに政府のいうことを信じていた。みんな、何の疑問もなく戦争の勝利を信じていた。良い面でも悪い面でも教育の力はすごいものがあります。総理大臣にはしっかりしてもらいたいですね（笑）。若い人には大所高所から世の中を見るような目を養ってほしい。そして、判断力のある人間になってほしいと思います。

私も娘たちを判断力のある人間になってもらいたいと思って育ててきました。私の子育ての基本でしたね。善悪、右にいくか、左にいくか、自分がどのような行動をしたらよいかというときに、判断する力を持ってもらいたいと思っていました。そのために学校にも行ってほしいし、経験も積んでほしい。私も子どもに的確なアドバイスができるような親になりたいといつも思っていました。成績がどうかとかいうことよりも、正しい判断ができるということの方がはるかに重要です。ひたすらそれを願っていました。

今の日本の教育は少し甘すぎるのではないでしょうか。会津藩の「什（じゅう）の掟」に「ならぬことはならぬものです」という教えがありますが、駄目なものは駄目という教育が必要だと思います。若い人には「希望」を持ってほしい。私たちは何もなかったけれど無我夢中で働いてきた。そしていつもネガティブにならず、将来に夢を持って生きてきました。戦後のものすごいインフレのなかでも、とにかく希望を持ち続けてきた。おカネよりもモノの時代でした。だから今でもモノを捨てられない（笑）。給料がいくら上がっても追いつかない。おカネよりもお米のほうがありがたかった。そんな時代があったのです。でも、将来が明るかったですね。

今は豊かになりすぎたのかもしれません。一方で希望がなくなってきた。私が戦後、一番欲しかった物がミシンでした。それを得たときの喜びは忘れられません。今は満ち足りていてそのような喜びがなくなっているのかもしれませんね。まあ、急に貧乏になれといっても難しいですけれどね。

東日本大震災のとき、日本中の人たちが何とか自分も役に立ちたいと思ったでしょう。あの一瞬の気持ちを忘れないことです。モノは豊かになっても、心の豊かさはまだまだです。これからは心の豊かさに将来の明るさを求めていくべきだろうと思いますね。戦後、引揚者たちは一瞬にしてすべてを失いました。神戸の震災も、昨年の震災も多くの人があっという間に多くのものをなくしてしまいました。でも、何が起こっても身につけた腕や知識はなくなりません。ですから、若い人にはしっかりそのような生き延びるための力をつけておいて欲しいですね。

インベストライフ2012年9月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

宮崎一幸さん

経済ジャーナリスト、インテリジェンス・ユー代表
東洋経済新報社に長く勤められた宮崎さんに、今回は母上の手記を提供していただき、また貴重なお話も伺わせていただきました。

私の父は島原の農家の出身でした。当時は5男坊、6男坊には相続する畑もなく、結局満州に行ったのだと思います。満州といっても近いですからね。東京に行くよりも、もっと簡単に行けました。父は、満州の学校で土木工学を学んだようでした。母は親戚の関係で満州に行き、父とは満州での見合い結婚だったようです。

私は昭和16年（1941年）2月に哈爾濱（ハルピン）で生まれ、5歳まで暮らしました。父は黒竜江の大きな仕事にかかわり、その支部長になっていました。当時は家と役所が一緒のようなもので、土地も3000坪ぐらいありました。

7月になると、もう秋の訪れで庭中にコスモスが咲く。そこに馬車で冬のオンドル用の材木を一日中運び込んでいた。そこで姉と砂遊びをしていたことを覚えています。満州人の使用人やロシア人のコックさんまでいました。

もうひとつ覚えているのは、のべつ宴会をしていたこと。料理屋などそんなにないですからね。うちには50人前ぐらいのお膳がありました。関東軍の人は宴会をするところがないので、うちに来ていたような感じでした。軍人さんは甘いものなどたくさん持っていた。ですから羊羹をくれたり、あめをくれたり、当時は珍しかったチョコレートをもらったりしました。よく覚えていますよ。芸者さんもしょっちゅう家に来て、どんちゃん騒ぎをしていました。

宮崎一幸さんの母上、宮崎静江さんの手記より（以下、囲みはすべて）

北満の果て、国境の町、黒河（コッカ、現在・中国黒龍江省愛耀、アイホイ）。私達一家はこの静かな町に、二年余り住みついた。広大な黒竜江の対岸はロシアのブラゴエ（ブラゴベシチエンスク）で，時折小さな人影がみえる。ロシア牽制のためか黒河のネオンはいつも灯いている。七月末には一家揃って黒竜江の花火見物と酒落こんだ。昭和二十年八月十二目、冬物の整理もすんで、やれやれと一息ついて庭に目をやると東菊が咲き始めていた。掃除も念を入れて、明日あたり長崎のおばあちゃんを奉天まで見送りに行った夫も帰って来ると思い、部屋に東菊を活けておいた。「組長さん、集合してください。」との声に表に出る。

ロシアとの戦いが始まったので、昼までに冬物衣料と食料を持って学校に集合との事。さあ大変だ。持てる物だけでも何とかまとめ、夫が帰ってきてもすぐ送れるようにと、汗だくで片付ける。ご飯を炊かなくては、と思いながら外を見るともうぞろぞろと皆道を歩いて行く。「急がなくては」、と朝のご飯を握り、寒いときの用心に毛糸ものをいっぱいに詰め、一幸にも幸子にも持たせる。大切なものは一つにまとめ、着られるだけ（五・六枚）服を着込んで洋を背に二人の手を引いて、家の戸締りをしっかりして学校へ急いだ。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

のどかで豊かな生活が、突然、一転しました。終戦になる前にソビエト軍が攻め込んで来たのです。攻めてくる前の晩、「どうもおかしい」といううわさが立ちました。「逃げなければいけない」と話している前日、関東軍の人たちは「転勤になりました」と言ってみんな先に逃げてしまった。関東軍が使ってしまったので列車も自動車もないので、持っている荷物を馬車に乗せ、私たちも逃げ始めたのです。守ってくれるべき関東軍はいないのにソビエト軍は攻めてくる。仕方がないので父たちは民間人だけで手元の銃を集めて、山にこもったのです。母の言葉によれば「死に行くのだと思うより、まるで出張を送り出すような気分でサヨナラをした」と言っていました。

山にこもった父たちは、夜が明けたら周りをソビエトのタンクに取り囲まれていた。タンクと戦く方法など誰も知らない。一発も打たずに降伏したそうです。それでシベリアに連れて行かれてしまった。関東軍で逃げ遅れて捕まった人たちと一緒にされてしまったのです。国際法上は捕虜を労働には使ってはいけないのですが、関東軍司令部はそれを認めてしまった。数十万人です。シベリアは何もない。攻めてくるソビエト兵も多くは囚人兵でした。父などは土木技師でしたから、本来はシベリアで長期間働かせられる可能性が十分あった。しかし、みんな、それを黙っていてくれたので3年ぐらいで帰してもらえたそうです。

でも、その間が大変だった。隣で寝ている人が死ぬのがわかる。亡くなる前の晩にシラミが一斉にいなくなるのだそうです。体温が下がるのですね。食べ物といっても黒パン一個ぐらいです。栄養失調になってボーッとしている。元気な人は弱っている人のパンを取ってしまう。取られた人は自分が食べたと思ってしまう。それぐらい意識がもうろうとしている。そして、そういう人は死んでいく。全体の3割ぐらいが亡くなられたと聞きました。零下40度か50度の土地ですからね。だから本当に便所のなかに落ちているジャガイモの切れ端でも何でも食べたと言っていました。

モンゴル方面とシベリア方面の両方から攻められていた。開拓農民の方がたくさんいて、それは本当に悲劇でしたね。開拓農民の方は子どもが多い。「産めよ、増やせよ」で、子どもは労働力ですからね。

石の轍の馬車でゴトゴトと大草原を逃げました。秋ですから見渡す限り桔梗が咲いていました。そこに飛行機が来て銃撃をする。その間は草の中にもぐって隠れる。私は子どもで小さかったので、桔梗が人間の背の高さぐらいに感じられた。轍が桔梗の紫色に染まっていた。敵機が去るとまた馬車で移動する。ずっと後年まで桔梗の夢を見ましたね。そのあと無蓋貨車に乗って逃げました。そうすると敵は銃撃に来るんですね。私の前にいたお母さんが赤ちゃんを抱いておっぱいをあげていた。その人が銃撃でやられて血が私にバサッとかかった。すごかったですね。これもいつまでも夢に見ました。

「水が欲しい」と子ども達にせがまれても一滴の水も無い。まわらぬ口で洋がブーブーするので唾でも飲ませてやろうとするが、いくら努力しても口の中はカラカラで喉が引きつるだけ。隣の人の水筒にはまだ水が入っているだろうか？こんな時には「下さい」とも言えない、人の事より自分が大切なものだ。男の人がいてくれたらなあと思う。子どもが泣き、その体に巻き付けておいた着物も邪魔になり一枚一枚脱ぎ捨てた。腕に付けていた時計も取ってしまう。

何だか頭がボーとしてきた。思ってもいない事が口から出る。それがおかしくて笑う。他人が見たらまるで気違いだ。私の血筋には気違いの人はいない、などと考えるくらいだから気がおかしくなっていないと思うのだが。なんだか頭のゼンマイが切れてしまったようだ。こんな事が二日も続いたら本当に気が狂ってしまうかもしれない。

「さあ、降りるんだ」という声にハツとして目を開いた。どうしたことか何も見えない。真っ暗だ。「奥さん！私の肩につかまりなさい」と誰かに声を掛けられて、ようやく汽車から降りた。まるで高い船の上から飛び降りたような感覚だった。皆夜の線路上にへなへなと崩れ落ちる。もう歩けない。何しろ水が欲しい。まわりをキョロキョロしていると、これが本当に天の助けというのだろう。雨が降ってきた。大きな口を空に向けて、思い切り雨水を飲む。ようやく元の私に戻れた思いがした。喉が潤うと、皆起き上がって駅に向かった。まだ目元が少し引きつっている。

要するに、玉音放送も何もない。もう敗けたのはわかっていた。父は自分たちを守るために山にこもったままいなくなってしまった。シベリアに連れて行かれたのですが、そんなことは残った家族にはわからない。死んだものか、あるいはシベリアか、そんなことはわからない。残された大人は女と年寄ばかりです。とにかく哈爾濱まで戻るのは大変だったのです。

インベストライフ2012年9月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

やっと汽車に乗れたが、子ども達は網棚に乗せ、四人掛けの椅子に六人座り、間には二人が立ってどうにも身動きが取れない。汽車の中で隣の赤ちゃんが死んでいった。奥さんが大声で泣きわめく。同情しなければならないと思いながら、無性に腹が立った。悲しいのは彼女だけではない、と口まででかかったが、ぐっと押さえた。家の洋も明日か明後日の命。洋はハシカにかかっていた。私はその時が来てもあんな様はしたくない、と心に言い聞かせた。

吟爾浜に早く着かないかと待っていたが、夜がきて空が明るくなってもまだ到着しなかった。死んでしまった赤ちゃんをおぶっていた人も、川の上から赤ちゃんを捨てた。ドボン、ドボンといくつもの音がする。捨てる人の顔も死人と同じ色だ。

哈爾濱に戻りましたが、元の日本人街を満州人が襲って来る。彼らは貧乏ですからね。それで何から何まで持って行ってしまう。身ぐるみはがれます。畳から何からすべて持って行ってしまうのです。電気も来ていないのに電球まで持って行った。私は木でできたタンクのおもちゃを持っていたのですが、それを取られそうになってギャーギャー泣きました。そのせいか、そのおもちゃだけは取られずにすんだのを覚えています。

ソビエト兵がマンドリンの形をした拳銃を撃って中国人を追い払う。そのソビエト兵の腕を見ると、いくつもズラッと巻き上げた腕時計をしている。しかもその時計の時間がみんな違う。彼らは時計が読めないのですね。母は女性だとわかると危ないので、頭を丸坊主にして顔に墨を塗っていました。満州人の服を着て男のような格好をしていました。

いよいよ八月十五日。天皇のラジオ放送を聞く。泣く人もいたが、私は泣けなかった。負けるという事はうすうす感じていた。負けたのだ。仕様が無い。泣く気力も無いのかもしれない。明日がどうなる事か、考えも付かない。

玉子でも茹でて食べようかと勝手口から外をのぞくと、幾十人もの満人がワイワイ言いながら品物を持ち出している。何が始まったのだろうかと思っている間に、こちらにもやって来る。ワーワーと叫びながら箪笥、戸棚、雨戸まであらゆる物が、大水に流されたように無くなった。恐ろしくて押入れに入り中から戸をしっかりと握っていた。青龍刀を持った者、鎌を振り上げる者、黒く脂ぎっていて、映画に出てくるそのままの顔をしてわめいている。今までの怨みを晴らそうと何から何まで片端から持って行ってしまう。暴動とはこういうものなのだろう。何も無くなってしまった。

ついには私達も引っ張り出される。Mさんが裸にされ、女はシミーズ一枚にされる。一幸にも手が伸びた。外を見るとロシアの兵隊が銃を構えて立っていた。「助けて」と大声をあげてロシア兵の後ろに隠れた。訳の分からぬ大声に満人たちはビックリして、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。その隙に私達も逃げた。

中国の、特に北満の人は文盲が多かったのです。日本人はほとんどが字を読める。彼らは、明らかに日本人は自分たちとは資質が違うと思ったのでしょう。それで、日本人の子どもをくれて言ってくる。しかし、男は仇討などする恐れがある。女の子は頭がよく、労働力になり言うことを聞く。小学校1年ぐらいの子がずいぶん中国人にもらわれていきました。それが中国残留孤児になったわけです。よく子どもを捨ててきたというような言いかたをされますが、実は、そのままいけばみんな死ぬと思っていた。そこに中国人が来てまんじゅう20個で子どもをくれという。中国人にあげた子どもは確実に生き延びられる。そして、まんじゅう20個で残った子どもたちが飢えずにすむ。だから名札を着物に縫い付けたりして中国人に子どもをあげた。だからこそ、戦後、「実は私が親です」と言って手を挙げづらくなってしまったのです。本当に壮絶ですよ。

二～三百人の満人がやって来て私達を一箇所に集め、ぐるりと周りを取り囲み、持っている物を出せと脅迫する。娘をくれと、手を引っ張る。取られたら大変！向こうとこっちで互いに手を引っ張り合う。娘が大声で泣き叫ぶ。泣いたので助かった。まったく日本人もこうなると哀れなものだ。

一人去り、二人去りして、夕方になってようやく家に入れた。中支那北安は昔、共産匪が農民になった所なので何をするかわからない。支部の会議室に女子どもを真ん中に、男の人達が周りを囲む。「ピストルが五丁有るので、いざという時は覚悟してください」と言われる。「私もお願いします」と頼んだ。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

終戦二日後の8月17日、北安の学校に収容されました。ひとつの教室に60～70人が詰め込まれ、頭と足を互い違いにして寝る状態でした。夜中にトイレに行くと、もう入る場所がない。夜もロシアの兵隊が女を探しにきます。明るくなると今度は時計をあさりに来る。3000人の共同生活でした。学校の校庭では、満人が昨日、略奪したものを市に出して売っている。

八月の暑さに身動きが出来ない生活で毎日病人が出る。はしかがはやり始め、2～3歳の子どもが櫛の歯が欠けるようにバタバタと死んでいく。病院の先生はいても薬は無い。長いニケ月だった。

何しろ便所に行くにも男の人の監視がないと安心して行けない。長い穴の上にコモがまいてあるだけの便所に二十人もの人が前の人のお尻を見ながら用を足す。一部が済むと「ハイ」と監視の手が挙がり、後の人がサッと跳んでくる。連れて行かれては大変なので、兵隊が来る前に用を足さなくてはならない。女の人は顔をわざと黒い泥を塗り付けて、お互いに見られた様ではない。それでも、黒いクーリーの服を着、真っ黒い顔をしていてもやはり自分は女だと思っているらしい。

小便の臭いなどで息が切れそうな汽車に詰め込まれ、哈爾濱を通り、2年前まで住んでいた新京にたどり着きました。平和な毎日を過ごした新京は、どこも暴動にやられ荒れ果てていました。そこで弟が亡くなりました。

家がロシア人に乱入されたので抱いて逃げているうちに、気が付くと洋が冷たくなっていた。この子は手が掛からない子で、2時間でも遊んでいた. こんな事になるのなら、昨年哈爾浜まで行って痛い思いをするトラフオームの手術などしてやるのではなかった。かわいそうに思う一方、親孝行の為に死んでくれたのかとも思った。小さい子ども3人を連れていた私はさすがに疲れていたからだ。近所の坊さんを呼び、児玉公園の生前仲のよかったMさんの子どものお墓の隣に埋めた。辺りは日本人の墓標でビッチリ、何千人埋めてあることか。

翌日、花を持ってお墓参りに行って驚いた。「犬と日本人、入るべからず！」と大書してあり、すっかりローラーで地ならしてあった。戦に負けた者の悔しさが胸に込み上げてくる。可愛そうな洋、きりも無く湧き出る涙をどうすることも出来なかった。

とにかく葫蘆島（コロトウ）の収容所までたどり着き、そこから博多まで逃げてきました。私は哈爾濱に戻ったところから本当に何も覚えていないのです。記憶がなぜか欠落している。次に記憶に残っているのが引揚船でした。上陸前に赤痢が発生して20日間、船に足止めを食わされました。いよいよ明日、上陸というので最後のお米を炊こうと置いておいた。そうしたらそれを盗まれてしまった。そんなこともありました。

上陸すると頭からDDTを浴びせかけられた。そして、自分の顔ぐらいあるお赤飯のおにぎりがもらえた。母は子どもが食べ残すのを期待していたのですが、みんな食べてしまった。

島原の父の実家に2～3カ月いて、その後、母の姉のいた千葉の大原、房総半島の先っぽですね、そこに転がり込んだのです。私もそこで小学校1年に入りました。大原は米も取れる。地味がそれほどよくないけれど野菜もできる。そして、魚は豊富です。ですから、ひもじい思いはなかったですね。そこの子どもたちはみんな太っているのに、こっちはガリガリ。よくいじめられましたよ。母は私たちをそこに預けて豊橋に就職していました。縫い物の仕事でした。その後、父がムーンフェースの真ん丸な顔になって帰ってきました。それであまり父には向いているとは思えない食料品屋を大宮で始めました。頑固な商売をしていましたね（笑）。貧乏でしたが食べ物には苦労しませんでした。

まあ、極限状態を体験したことで「どうせ一回は死んでるわ」という気持ちはありますね。それとね、ドリス・デイが歌っていた「ケ・セラ・セラ」の気持ちですね。あ、それから、1929年のミュージカル、「回転木馬」のなかに「You never walk alone（君は決して一人で歩かない）」という歌があります。エルビス・プレスリーも歌っています。

インベストライフ2012年9月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

嵐の中を歩くときもあなたは一人ではない
嵐の向こうには輝く大空がありひばりの歌声が聞こえる
だから顎を引き締めて真正面から向かって行け

というような歌です。酔っぱらうとよく歌いながら家に帰ります。この歌の歌詞も好きですね。

若い人へのメッセージ？　そう、今の人はあきらめるのが早いですね。人間、極限状態になると「できない」と思っていたことが「できる」方にスイッチが入ります。卑近な例でいえば、いくら練習してもできなかった鉄棒の逆上がりが必死に練習しているとできるようになり、あとはずっとできるようになる。もうだめだと思ったところでようやく能力のスイッチが入る。ですから、あきらめるのが早いといつまでたっても本来の力が出てこない。

ちょっと優秀な子には、「お前ら、そんなにエリートじゃないよ」と言いたいですね。世界のエリートはもっとすごい。格差社会というのは自分たちが作っているのです。偏差値が低いとそれだけで自分をダメだと思ってしまう。あきらめてしまう。逆に偏差値が高いからといって、そのことだけで優秀だともいえない。勝手に自分たちがそう思って、自分たちで格差を作っている。その格差によって自分の成果が裏切られると思うとガクッとくるんですね。格差を作るのに加担するなと言いたいですね。

後記にかえて対談：島田知保さんx岡本和久

岡本　8月は終戦記念日です。戦中・戦後を生きぬいた方々も数が減っています。極限的な状況を体験した方々の体験は、ある意味われわれの持っている貴重な資産です。その体験が風化しないように、消えてなくならないように文章の形にしておくことも意義があると思い、2回に分けて特集を組むことにしました。もちろん、とてもありがたいことなのですが、われわれはあまりに長く平和で安楽な生活が続いてきたために、それを普通だと思うようになってしまった。そして、「苦しい」とか、「大変だ」という基準がすごく低くなってしまい、ちょっとしたことでも「もうダメだ」と思うようになってしまった。そんな気がするんですが。

「国」と「国防」を考える

島田　確かにそんな気はしますね。

岡本　私は1946年、終戦の翌年に生まれました。先月号で紹介した父の手記にもあったように、私の生家の台所の床には大きく焼け焦げた跡があったのを覚えています。また、家に砲弾や鉄兜があり、近所の東京工業大学には防空壕がたくさん残っていました。庭に掘った防空壕は小さな池になっていました。もちろん貧しかったし、粗末な服で学校に通い、決しておいしいとはいえない脱脂粉乳とコッペパンの給食で育ちました。しかし、まあ、そこを原点としてみればずっと平和が続いて経済が発展し、成熟し、それなりに豊かな国ができました。

しかし、一方で国防面での安全などは極めて意識が薄くなってしまっている。みんな、生活の安全・安心にはとても敏感なのにね。国防はアメリカ任せのようになってしまった。一方のアメリカは戦後もずっとどこかで紛争に巻き込まれている。60年代の中ごろ、私がアメリカの大学に行ったころは本当にベトナム戦争が激化しつつあるときでした。しかも、国民皆兵制です。ルームメートが18歳の誕生日に徴兵局に登録に行ったのをよく覚えています。成績の悪い順にベトナムに飛ばされるというようなうわさがまことしやかに流れていました。徴兵制はなくなっても、アメリカはずっと戦争と隣り合わせの暮らしをしていたんです。しかし、日本にはこれが完全に抜け落ちている気がします。決して、戦争がよいと言っているわけではないですが、緊張感というか、危機感は絶対に必要です。

島田　国防に対する考え方はいろいろあると思います。でも、われわれの生活は決して戦争とかかわりがないのではなかった。ずっと米軍基地はあったわけですしね。私の大学は外国人も多かったし、そのなかには基地の人たちもたくさんいました。でも、正直言うとやはり彼らが持ち込む習慣というか、行動は受け入れられないものも多かった。ドラッグとか、人身売買とかですね。韓国は徴兵制がありますが、やはり、家族や友達と隔離されて人間性を捨てる訓練を受けるというのは人道的にもよくないと思います。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本　確かに戦争することは決してよいことではありません。でも、われわれ、自立が大切といっていても最後の最後にはやはり国の保護の下に入っている。日本国のパスポートがあるから世界中、ほとんどの国に自由に行けるのです。もし、パスポートがなく海外に放り出されれば、その人がどうなっても誰も守ってくれない。その一番基本的な生存を確保する部分で、国というのはまだ現在の世界では重要なのです。ですから、国というものが消滅するということの恐ろしさをわれわれは忘れていると思うんです。玉音放送のあと、「もう、日本はなくなったのよ」とお母さんが子どもたちに告げる上田卓さんのお話がありましたが、これは本当に胸にグサッと突き刺さる言葉でしたね。

島田　国の存在はものすごく大きな保障ですよね。今は、国が守ってくれていることが当たり前のようになってしまっている。もともと国境は人間が引いた境界で、時代によって変化するもの。どんな国もいつかは消えてなくなる。戦争で国を守るにしろ、非暴力で国を守るにしろ、相当の覚悟が必要です。スポーツのときとか、不満のはけ口としては、国が意識にのぼってくるけれど、国を守るために自分がどうするかということはほとんどの人は考えていない。

岡本　国が守ってくれるのが当然と思うのと同じように、平和も当然という前提でわれわれの生活が成り立っています。本当は平和ではなくても、平和を直視しない状態といったほうがいいかもしれませんけれどね。

島田　自分たちで自分たちの国を守るという、意志のある国とない国では社会の組み立てからがかなり違ってくるように思います。国を守るという意志を浸透させる際に、ボトムアップか、トップダウンかという違いがあると思いますが、私は今の日本では、やはり国民一人ずつの意識を高めるボトムアップ方式の方がいいのではないかと考えています。個人がしっかりしてくることで国という器もしっかりしてくるのかなと思うんです。

今回、記事を読んでいて、実は現在の状態は戦後と似た部分があるのではないかなと感じました。東日本大震災後の日本と戦後の日本。戦後の日本には焼け野原から立ち上がろうという、ある意味希望があった。でも今は、みんなちょっと疑心暗鬼になっている。国も方向性を示せないでいる。そのようななかでみんながつながってきているという面もあると思うんですよね。

「戦後」と「3.11後」の違い

岡本　3.11と戦後の違いで一番大きいのは、戦後のときは今後の方向性を示してくれる、というか押し付けてくれる存在があったということでしょう。アメリカというね。「これからはこういう風にやらなければいけないんだよ」と針路を教えてくれた。功罪ともにあるとは思うけれど道筋をつけられた。3.11ではそれがない。

島田　ビジョンが見えない。本当はわれわれ個人がビジョンを示さなければいけないんですけどね。誰かがグランド・デザインを描いてくれるのを、口を開けて待っている。

岡本　なぜ、そうなっているかというとやはり戦後のグランド・デザインも人に描いてもらったものだからでしょう。与えられることに国民が慣れてしまっている。

島田　かなりいろいろとキーワードは出てきています。持続可能な社会とか、地球規模での共存とか。それらのキーワードが経済や国家、あるいはわれわれの腑抜けた楽観主義のなかでうまくかみ合っていないということがあります。

岡本　「そんなのきれいごとだよね」とか「現実の社会ではそんなのうまくいかない」という既成観念で打ち消されてしまう。国家レベルでも、企業レベルでも、個人レベルでもキーワードが単なる概念で終わってしまっている。エクセキューションがないんですよね。政府が悪いのかといえばそれまでですが、でも、その政府を選んでいるのは国民ですからね。

島田　何かあるとみんな政局になってしまう。虚しいですよ。

岡本　希望が持てるのは、東北の悲惨な状態のなかから戦後を生きぬいたような力を持った強い人たちが出てくることだろうと思います。将来の日本のリーダーとなる人が、今回被災された若い方からたくさん出てくるでしょう。それを期待したいですね。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

島田　戦中・戦後の厳しい状態のなか、歯を食いしばって生きてきた人たちがいて、その結果私たちが今こういう暮らしができている。安心な暮らしを謳歌するばかりでこのときに何もしなければ、前の世代の遺産を食いつぶすだけです。少し長い歴史感を持って自分たちの今を見てみると、これからの生き方や経済の見方なども変わってくるかもしれない。若い人にはぜひ、それをやって欲しいですね。

岡本　難しいのは、苦難が強い人間を生み出すとしても、今のこの豊かな日本が現実にあるわけで、急に「貧乏になれ」と言われても無理な話です。それではどうしたらいいのか、それが今回いろいろな方を取材して常に頭から離れなかった疑問でした。それで思うのですが、今、円高が進んでいるのは、ある意味日本の産業のグローバル化の遅れが引き起こしている面があります。もっと多くの企業が海外生産を増やし、生産拠点を新興国や発展途上国に移せば円高は止まるでしょう。でも、当然の結果として国内に雇用機会が減り、仕事を求めて遅れた国に出ていく人も増えます。その人たちは戦後の日本ほどではないでしょうが、やはり、貧しい生活がどんなものか、そのなかでどうしたら生き延びていけるのかということを学んでいくでしょう。これもひとつ経済の神様が与えてくれている試練なのかな、などとも思います。

「過保護」が「生き延びる力」を奪う

島田　80年代、90年代にはまだ若い人たちがそういうところに行こうとしていたんですね。その非日常的な生活がひとつのエンターテインメントだったということはあっても、彼らが今、NGOやNPOで活躍しているという事実もあります。わざわざ外国なんか行きたくないということを聞くと、ちょっと大丈夫かなと心配になりますよね。

岡本　私は70年代の初めにブラジルのサンパウロで勤務したことがあります。当時のブラジルは今と違ってまさに発展途上国でした。バスに乗ればノミ・シラミがつく。町にはスリ・かっぱらいがいつも狙っている。私が駐在した2年間、わが家には電話がありませんでした。ブラジルの高層ビル35階にオフィスがありましたが、そのビルが火事になったことがあります。屋上に避難して消火を待ったのですが、あとで考えると危なかった。ちょうど、「タワーリング・インフェルノ」という映画が上映されているころでした。まあ、かなりの低開発国での生活でしたが、ブラジルで生活した経験は本当に人生で役にたっています。

島田　私も80年代、バックパックで世界のさまざまな場所に行ったのは貴重な経験でした。モノがなくても人間は生活ができるとか、日本が安全の代償で何を失っているかとか、いろいろな発見がありました。安全ではないところでも人間は生きているんですよね。

岡本　そう、安全じゃないから生き延びる力が出てくる。

島田　日本はあまりに過保護ですよね。電車降りるときに忘れ物の心配までしてくれる（笑）。

岡本　ホームでは電車が来るので黄色い線の内側に下がれとか・・・・・・（笑）。

島田　アメリカのグランドキャニオンでは、一目見て落ちれば死ぬとわかるところには柵がない。そういう意味では二重、三重に安全網をめぐらしてくれることで自分の頭を使わない、自分の危機に対する感覚を使わないということになっている。

岡本　動物的な生命力というか、サバイバル力がひ弱になっていますよね。

島田　もう一つは教育の問題です。学芸会で主人公のお姫様が5人も6人もいるというおかしな現象がありますね。徒競走で全員が一着とか。本当は社会のなかで自分の能力を相対化して考えることを止めてしまっているのです。みんな気位は高いけれど謙虚さがない。

岡本　規格大量生産は工業製品だけでなく、子どももそうです。ですから、ちょっと人と違うと、欠陥品としていじめの対象になる。昔、足の遅い子は「くやしかったら勉強でこい」などうそぶいていた。そんなしぶとさが欲しい。

インベストライフ2012年9月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

島田　ファッション雑誌で同じものを売りつけようとしているのに、キャッチフレーズが「わたし流」だったり「自分流」だったりする。これ自己矛盾ですよね。ある意味、消費文化に絡め捕られた箱庭のような文化になっている。だから、30～40代になって突然、仕事を辞めて「自分探しの旅」に出たりする。「自分」は仕事をするなかで探していくものです。

岡本　本当にそうです。どこかの場所に「自分」が落ちているのではない。自分のなかにしか自分はいないんだから。角界に「欲しいものは全部、土俵に埋まっている」という言葉があるそうですが、欲しいもの、自分も全部、仕事という土俵に埋まっている。必死にそれを掘り出せばいいんです。

島田　もうひとつ顕著なのが資格収集ですね。いろんな資格を取って安心したり、成功した人の書いた本を読んでそれを真似ようとしたり・・・・・・。

岡本　3時間でわかるナントカみたいな（笑）。

島田　そんなことで成功できるならみんな成功していますよ。解答がないのが人生です。でも、何かを習おう、教えてもらおうとする。

岡本　学ぶのはよいことだけど、近道、早道、楽な道を教えてもらいたがる。長期投資でのんびりやっていればいいのに、みんなすぐに儲かる短期投資の方法を知りたがる。何かうまい方法があるはずだと思っている。

島田　あるいは貯金しているから大丈夫という人や、将来の生活を考えるのが不安だから考えないという人もいる。でも、比較的豊かだとか、日本が安全だとかいう状態はあまり長くは続かないかもしれない。もっと切迫感を持ったほうがいいと思いますね。

「安全」の意味とは

岡本　だからね、震災や原発の例でもわかりますが、何が起こるかわからない。もしかしたら隣の国が突然日本を攻めてくるかもしれない。たぶん、起こらないだろうけれど、絶対にないとはいえない事象に対して、もちろん国としての対策は必要ですが、同時に個人のレベルでも「万一」の場合にどうするかということは少しだけでも考えておく必要がある。それを国が何とかしてくれるだろうと丸投げするのは間違いですよ。「座して死を待つのは嫌だ」と思うなら「いざ」というときの備えを自分で考えておくことです。それが選挙での投票行動で表現されたり、自分年金づくりになったり、あるいは海外に口座を持って資産の安全を図るというようなことになるのではないでしょうか。

島田　アジアの人って金（きん）を身に着けているじゃないですか。何かのときに着の身着のままでも金だけは残る。そういう緊張感が日本にはあまりないですね。

岡本　オスプレーの配備が問題になっています。私はオスプレーが最適な機種かどうか、それが本当に戦略的に必要なのかはわかりませんが、少なくともアメリカは「安全」のために配備を考えている。日本の反対派は「安全」の面でNOと言っている。同じ「安全」でも全然意味が違う。

島田　そうですよね。もし、NOならそれに対してどのような対案があるかという点が抜けている。東日本大震災のような悲劇も、日本では結構風化が早い。原爆を広島と長崎に落とされたのに、すぐに「アメリカ大好き」になってしまう。最近の若い子は原爆を落とされたといっても「間違って落としてしまった」ぐらいにしか理解していない。だいたい、日本とアメリカが戦争していたことだって知らない。

岡本　つい、60数年前のことが遠い歴史上の事件になってしまっている。保元の乱や応仁の乱とはいわないけれど、少なくとも、日清・日露・第一次対戦と並列になってしまっている。それとともにその極限状態における体験も失われつつある。極限状態で得た生き延びる力も伝わらなくなっている。それは日本としては本当にもったいない。それゆえ、この企画には意義があると思ったのです。

島田　のんびりとしていても、いつ、戦争が起こるかなんてわからない。特に今のような経済環境ですとね。私は、よく「今の日本はワイマールだ」と言っているんです。他力本願のままでいると、忘れたころに災難がやって来る。声の大きい先導者が出てきてみんながあおられる。方向を示してくれてみんながその方向に向かって走り出す。

 Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本

今回の聞き取り取材で感じたことをまとめておきましょう。一つは戦中・戦後の極限状態は決して過去のものではなく、これからだっていつ起こっても不思議ではないということです。東日本大震災はそれを思い出させてくれました。この点はとにかく忘れないでほしい。そして、そのようなときにでも耐えられるように平和ななかでも「生き延びる力」を養っておいて欲しい。極限状態を体験するのは難しくても、たとえば必死に仕事をする、発展途上国で何年か仕事をしてみるというのもいいと思います。また、真摯に東北の復興活動に参加してみる。少なくとも極限状態の疑似体験をしてみるとことは意義があると思います。

そして、最後に「いざ」というときに生き延びられるように心構えを持つこと。もちろん、個人として、自分を守るための手段を講じることは当然です。しかし、それには限界がある。やはり、国というものの存在は大きいのです。ですから、個人、生活者として少しでも国や企業がよくなるような働きかけを続けていくことが非常に重要なのではないかと感じます。多くの方が戦中・戦後の体験をあまりお話になりたがりません。今回、取材に応じていただいた上田さんご兄妹、田中さん、鳥山さん、宮崎さんに深く感謝したいと思います。

インベストライフ2012年9月号　Copyright © I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社

＜モデルポートフォリオ：2025年8月末の運用状況＞

単位：％

		トータルリターン・％				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の投資額に対する騰落率・％			
		1ヵ月	1年	5年（年率）	10年（年率）	10年（年率）	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～308万円
4資産型	積極型	1.62	13.41	15.33	10.18	13.54	9.36	46.42	93.56	258.84
	成長型	0.73	8.22	9.85	6.85	9.08	5.72	28.06	54.86	153.94
	安定型	-0.15	3.18	4.50	3.46	5.22	2.17	12.18	23.91	76.71
2資産型	積極型	-0.21	14.50	16.66	11.60	15.14	8.69	50.65	109.81	323.82
	成長型	-0.55	10.33	11.59	8.19	10.77	6.11	34.16	69.78	200.50
	安定型	-0.88	6.21	6.60	4.71	7.14	3.53	19.57	37.30	109.01

＊投資にかかるコストは控除していない。積み立ては、税引き前分配金再投資。ポートフォリオは毎月リバランスをしたものとする。
積み立ては計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2024年8月末に1万円投資資金を 積み立て始め、
←累積月数をコピペする年7月末の投資資金までとする（2025年8月末積み立て分は運用期間がないため含めていない）。
出所：モーニングスター・ジャパンがMorningstar Directにより作成。Morningstar Directについてのお問い合わせは、お問い合わせメール（https://www.ibbotson.co.jp/contact-us/）まで。

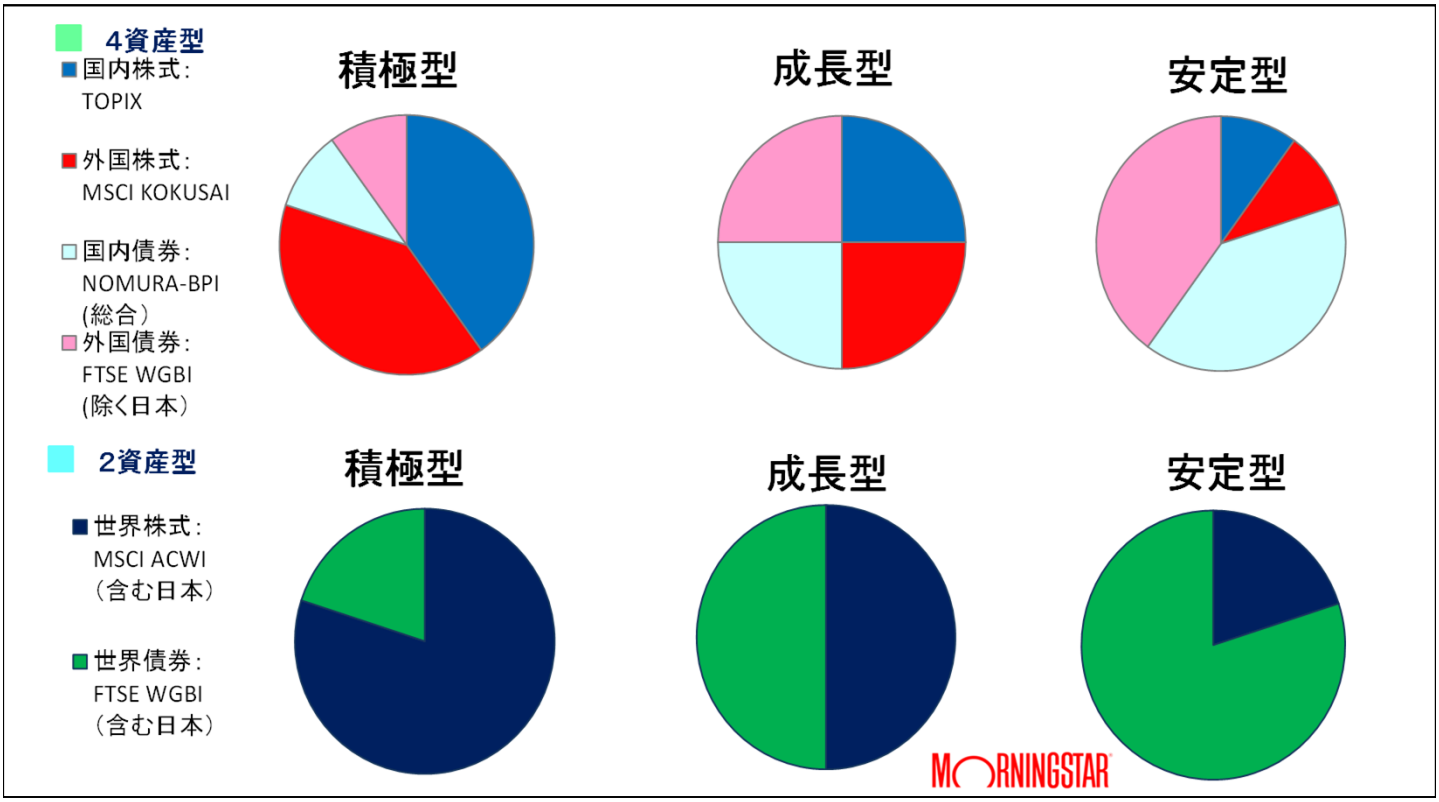
ポートフォリオの資産配分比率（外貨建て資産は円換算ベース）

		国内株式：TOPIX	外国株式：MSCI KOKUSAI	国内債券：NOMURA-BPI（総合）	外国債券：FTSE WGBI（除く日本）
4資産型	積極型	40%	40%	10%	10%
	成長型	25%	25%	25%	25%
	安定型	10%	10%	40%	40%

		世界株式：MSCI ACWI（含む日本）	世界債券：FTSE WGBI（含む日本）
2資産型	積極型	80%	20%
	成長型	50%	50%
	安定型	20%	80%

ポートフォリオは「インベストライフ」が参考のために考案した資産配分に基づき、モーニングスター・ジャパンがデータを算出しています。
特定の資産配分による投資の推奨を行うものではありません。

「長期投資仲間」通信『インベストライフ」の
その他の記事はこちらからご覧ください。
http://www.investlife.jp/



Copyright ©2025 Morningstar Japan.

＜主に運用会社による直接販売を行っているファンド：2025年8月末の運用状況＞

当資料は「インベストライフ」のために、モーニングスター・ジャパンがデータを算出、作成しています。
特定の投資信託による投資の推奨を行うものではありません。

運用会社名	ファンド名	トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の投資額に対する騰落率				1万円ずつ積み立てた場合の月末資産額				2025年8月末		2025年5月末	2025年8月中
		1ヵ月	1年	5年（年率）	10年（年率）	10年（年率）	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～308万円	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～308万円	純資産（億円）	基準価額（円）	（前回掲載時）基準価額（円）	推計資金純流入額（億円）
セゾン投信	セゾン・グローバルバランスファンド	0.13	11.14	11.50	7.67	10.73	6.33	33.62	66.64	—	12.76	80.17	199.96	—	5,635.7	27,697	25,757	19.83
さわかみ投信	さわかみファンド	1.38	2.73	10.24	6.69	15.90	4.55	22.63	48.98	329.38	12.55	73.58	178.77	781.47	4,241.1	40,327	38,117	-38.36
セゾン投信	セゾン資産形成の達人ファンド	-0.03	8.97	13.98	10.83	17.87	5.37	35.70	89.84	—	12.64	81.42	227.80	—	3,888.6	45,820	42,823	9.85
レオス・キャピタルワークス	ひふみ投信	3.51	10.66	8.30	9.34	15.74	10.67	27.31	59.39	—	13.28	76.39	191.27	—	1,807.3	79,476	72,463	-15.48
コモンズ投信	コモンズ30ファンド	-0.65	4.64	11.74	9.09	16.65	4.83	25.60	65.49	—	12.58	75.36	198.59	—	705.4	51,343	49,189	1.82
レオス・キャピタルワークス	ひふみワールド	-2.36	13.64	15.37	—	—	7.48	45.09	—	—	12.90	87.05	—	—	636.9	24,986	22,577	-1.04
鎌倉投信	結い 2101	1.54	5.30	2.60	3.35	8.42	5.85	7.70	17.43	—	12.70	64.62	140.91	—	471.6	22,410	21,050	-5.83
レオス・キャピタルワークス	ひふみクロスオーバーpro	2.88	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	332.0	11,434	10,489	5.32
fundnote	fundnote日本株Kaihouファンド	7.42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	324.2	12,877	11,187	-0.43
ありがとう投信	ありがとうファンド	0.42	13.64	13.44	9.58	16.98	7.47	39.24	84.51	—	12.90	83.54	221.41	—	257.9	39,377	36,525	-0.08
レオス・キャピタルワークス	ひふみマイクロスコープpro	3.13	20.43	—	—	—	16.03	—	—	—	13.92	—	—	—	156.4	11,856	10,473	0.90
ユニオン投信	ユニオンファンド	1.38	8.97	10.61	7.01	14.98	6.23	27.14	54.50	—	12.75	76.28	185.41	—	151.6	40,989	38,601	-0.27
パリミキアセットマネジメント	コドモファンド	2.86	14.09	8.18	7.53	14.47	10.18	25.54	51.18	—	13.22	75.32	181.42	—	126.5	27,977	26,076	0.66
コモンズ投信	ザ・2020ビジョン	5.10	18.35	9.25	9.75	22.32	13.32	30.88	80.83	—	13.60	78.53	216.99	—	102.4	32,402	28,998	-0.10
セゾン投信	セゾン共創日本ファンド	3.53	7.03	—	—	—	8.69	—	—	—	13.04	—	—	—	55.6	13,929	12,738	0.29
fundnote	fundnote IPOクロスオーバーファンド	2.26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	38.0	11,617	11,304	0.60
パリミキアセットマネジメント	浪花おふくろファンド	1.27	7.92	7.67	7.31	13.73	5.83	23.06	48.74	—	12.70	73.84	178.48	—	20.3	32,746	30,965	-0.03
レオス・キャピタルワークス	ひふみらいと	-0.24	-0.82	—	—	—	-0.51	—	—	—	11.94	—	—	—	20.1	8,820	8,614	-1.17
HCアセットマネジメント	HCインカム～夢のたね	0.24	2.53	—	—	—	1.46	—	—	—	12.18	—	—	—	3.7	9,742	9,605	0.00

*積み立ては税引き前分配金再投資、計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2024年8月末に1万円で 積み立てを開始し、2025年7月末投資分までの8月末における運用成果とする（8月の積み立て額は入れない）。

Copyright ©2025 Morningstar Japan